

むかし。ある教会の中に、毎晩、トーレ・エッペという男の幽霊が現れました。それは、かさかさにひからびてミイラになった幽霊でした。

近くの村に、恐いもの知らずの娘が住んでいました。ある晩、その娘に、村の仕立屋たちがふざけていました。

「もし、教会に行つて、トーレ・エッペを連れてきたら、何でも好きな物を買つてやるよ」

「ほんとう？じゃあ、トーレ・エッペを連れてくるから、すてきな手織りの服を作つてよ」

「いいともね」

仕立屋たちは、まさかほんとうに娘がトーレ・エッペを連れてくるなんて思いもしませんでした。ところが、娘は教会に行き、トーレ・エッペを背負つて帰つてきて、仕立屋たちの仕事台の上ですわらせました。

トーレ・エッペは、ぽっかり空いた大きな目で仕立屋たちをじつと見つめ、じりじりとはいよつてきました。仕立屋たちは、凍り付いて、娘にむかつてさげびました。

「お願いだ。こいつを追いはらつてくれ。こいつを教会に連れもどしてくれ。そしたら、服をもう一着作つてやるよ」

娘は、すぐにトーレ・エッペを背負つて、教会に連れていきました。ところが、もとの所ですわらせようとすると、トーレ・エッペは、両手で、娘をがっしりつかまえてしまいました。

「放してよ、トーレ・エッペ」

トーレ・エッペはどうしても放そうとしません。そして、しまいにこういいました。

「今夜のうちに、谷川の橋の上に行つて、『ペールの娘、アンナ、おまえはトーレ・エッペを許してくれるか』と三回たずねてくれ。そう約束しなければ、放してはやらない」娘は、

「ええ。いいわ。約束するわ」といいました。そのとたん、トーレ・エッペは、手を放しました。

谷川までたつぷり一マイルはありましたが、娘はまっくらな中を恐がらずに歩いていて、橋の上まで来ると大きな声でたずねました。

「ペールの娘アンナさん、あなたはトーレ・エッペを許してくれますか」

三回たずねるやいなや、川の中から女の声が出て、

「神さまがあの人をお許しになったのなら、私もあの人を許します」といいました。

娘が教会にもどつてくると、トーレ・エッペが、返事をせがみました。

「あの女は、なんていった？」

「神さまがあの人をお許しになったのなら、私もあの人を許しますって」

トーレ・エッペは大喜びしていました。

「ありがとう。では、日がのぼる前にもういちどこにきてくれ。礼がしたい」

娘は家に帰り、朝、日がのぼる前に、もういちど教会に行きました。すると、トーレ・エッペがすわっていたところに、銀貨が山のように置いてありました。娘は、銀貨を手に入れ、仕立屋たちからは新しい服を二着もらいました。

トーレ・エッペの幽霊は、二度とすがたをあらわしませんでしたとさ。

原話…『北欧の民話』山室静著／岩崎美術社

再話…村上郁◎